

戦後開拓地のライフヒストリー（2）

—岩手上郷分村開拓における若者たちの職業経歴の再構築過程—

A Life History approach to Postwar Reclamation(2)

Reconstruction Process of Youth's Career in Kamisato clearance, Takizawa, Iwate

高瀬 雅 弘*

Masahiro TAKASE*

要 旨

本稿は、戦争によって職業経歴の断絶を余儀なくされた若者たちが、どのようにしてその再構築を図っていったのかを、ひとつの戦後開拓地をフィールドとして考察したものである。具体的には、長野県上郷村からの分村計画によって生まれた、岩手県滝沢村・上郷分村に入植した人びと（若者たち）の入植に至る経緯、開拓地での共同生活、個人経営への移行と家族形成までの過程から、新たな職業経歴の形成がいかんしてなされたのかを考察する。ここから明らかになるのは、ほぼ同じ世代の若者たちからなる開拓地のなかで形作られた共同性と、共同から個人へ、および個人から家族へという移行のタイミングが職業経歴の安定化にもたらした影響の大きさである。本稿は、開拓地という地域社会の変容過程と若者たちのライフコースの関係性を通じて、戦後開拓というものを捉え返そうとする試みである。

キーワード：戦後開拓 過剰人口問題 引き揚げ 職業経歴 ライフコース

1. はじめに

（1）問題の所在

1945年11月に策定された「緊急開拓実施要領」に始まる戦後開拓は、アジア各地を中心に拡散し、終戦を機に引き揚げてきた人びと、ならびに戦災によって生活の基盤を喪失した人びとを、国内において再配置する政策的な試みであった。全国の開拓地へと再配置された／自らの意思によって移動を選択した人びとの多くは、敗戦によってライフコースの立て直しを迫られた存在である。そこにおいて人びとはどのような意図に基づき、どのように自らの人生を再設計しようとしたのだろうか。本稿は、長野県から岩手山麓の戦後開拓地に10代後半から20代で入植した若者（1910年代後半～30年代前半生まれ）を対象に、彼らの職業経歴の再構築過程を通して、こうした問いについて考察しようとするものである。

本稿が若者を分析対象とする理由は2つある。

第一に、若い世代、すなわち職業経歴を開始して間

もない段階での断絶は、その後の職業経歴の再構築においてより大きなエネルギーを必要とすると考えられる¹。それは成人期への移行と戦争による職業経歴の断絶との重なりが、ライフコース設計において、一般成人とは異なった形の剥奪として経験されるということである。

第二に、この世代の若者たちが「農村過剰人口問題」あるいは「二三男問題」の中心をなすものとしてまなざされていたということである。彼ら彼女らより若い世代は、やがて高度経済成長のもとで、工業労働市場へと吸収されていくことになる²が、本稿が対象とする世代の若者は、過渡的な時代状況のなかで職業経歴を模索しなければならなかったのである。

このような問題意識から戦後開拓というものを捉えてみると、次のような問いが喚起される。

ひとつは、戦後開拓（地）が職業経歴の再構築の「場」としていかなる役割を果たしたのか、という問いである。ただしこの問いは戦後開拓の成功を前提としたものであり、同時になぜその役割を果たし得な

* 弘前大学教育学部社会科教育講座

Department of Social Studies, Faculty of Education, Hirosaki University

かったのかということもまた問われなければならない。職業のみならず居場所をも喪失した若者たちにとっての、「場」としての戦後開拓地の意義が問われる必要がある。

もうひとつは、自らの土地を所有するということが人びとにとっていかなる意味を持っていたのか、という問いである。そこには単なる資産の獲得という側面だけでなく、「自立」への過程という意味も込められている。いわゆる「一人前」となることはどのようなものであったのか、さらにはその過程はいかなるものであったのかについても問われる必要がある。

(2) 先行研究の知見

戦後開拓地をフィールドとした研究は、歴史学、人文地理学、農業経済学、社会学といった分野において蓄積されてきた。多様なアプローチに基づく先行研究のなかで、本稿との関わりにおいて重要な意味をもつものについて、ひとつには分析視角の観点から、もうひとつには方法論の観点から整理をしておきたい。

①分析視角としての共同体論

「緊急開拓実施要領」の策定から半世紀以上の年月が経過するなかで、戦後開拓地の構造的な変容を捉える共同体論に基づいた研究が蓄積されてきた。蘭信三は、「選択的」共同体、シンボル共有体といった分析概念を用いて、そこでの共同性や“きずな”と集落の変容過程の関係を描いている³。

地理学や農業史においても、集団の形成と展開を規定する共同性を解明する研究が蓄積されてきた⁴。これらの研究では、人的なネットワークが開拓の展開に果たした影響が明らかにされている。

また近年では、政策との関わりにおいて、現代に至るまでの戦後開拓の展開を捉えようとする研究も蓄積されている⁵。そこでは戦後農業の衰退過程と重ね合わせる形での既存の研究のアプローチとは異なり、現状に立脚して戦後開拓における共同体の展開過程を捉えることが指向されている。

こうした共同体論は、営農実績といった要素とは異なる視点から、戦後開拓地とそこで形成されるコミュニティの独自性を浮かび上がらせてきた。これらの研究が明らかにしてきた「場」の特性は、本稿の分析にとって重要な示唆を与えるものである。

②方法としてのライフヒストリー

近年の戦後開拓研究においては、それまでの歴史

学、地理学、経済学的なアプローチに加えて、入植者の語りに基づいたライフヒストリーが方法論として重要な位置を占めるようになってきている。こうしたアプローチは、戦後開拓とも深い関わりをもつ満州への開拓と引き揚げの実態を明らかにしようとする「満蒙開拓を語り継ぐ会」・飯田市歴史研究所の調査活動⁶などによって深められ、その延長線上に戦後開拓地への入植者を対象としたライフヒストリーが蓄積されてきた。

また、三好豊の研究⁷は、戦後開拓へと至る契機を個人的なライフヒストリーと社会経済の動向とを関連づけながら読み解こうとするものである。そこから明らかになるのは、個人的な経験が開拓を行ううえでの重要な資本となっていたということである。

当事者によるライフヒストリーは、政策や経済状況の変化といった外在的な要因に還元されない要素を抽出するうえで有効である。このことと関連して、開拓や営農に関する主観的な意味づけを探ることができる。加えて、それほど文献資料が多く残されているわけではない戦後開拓地の特性を鑑みた場合にも、この方法論のもつ意義は小さくない。

ただし、この分析視角と方法とを重ね合わせてみたとき、これまでの研究において依然として残されている課題があることに気づく。それは次のようなものである。

第一に、共同体論に基づく戦後開拓研究は、個々の集落ないし村落が持つ構造的特性に多くの関心を払ってきた。そこでの分析の単位はひとつないしは複数の集団という形をとる。こうした研究においては、集団の成員個人が主たる分析対象となることはない。このことによって、戦後開拓地における集団と個人との関係が捨象されたままになっている。

第二に、個人を対象としたライフヒストリー分析は、個人のライフコースがいかにして形成されてきたのかを明らかにしようとする点で、従来の研究とは異なった知見を提供してきた。しかしながらその結果、集団内における個人間の関係や相互作用といった視点が相対的に後景に退くこととなった。そのために、リーダーとフォロワーの関係性がどのように形作られていったのか、人びとは関係性のもとでどのように成長していったのか、といった点についての検討は、依然として残された課題であるといえる。

本稿は、既存の研究の成果と限界をふまえて、上記のような課題に答えようとするものである。

（3）分析課題

本稿では次の2つの分析課題を設定する。

第一の課題は、戦後開拓を職業経歴の再構築、あるいは移行（トランジション）の視点から読み解いていく⁸ことである。社会学的な戦後開拓研究においては、開拓地への入植が包摂と排除という視点から捉えられてきた⁹。そうした視点の重要性をふまえたうえで、そこに介在する選択的な要素に注目したい。

本稿の対象となる入植者たちのほとんどは、世代的に、ライフコース上の比較的早い段階において、敗戦による職業経歴の断絶を経験し、同時にその再形成を必要とした人びとである。彼ら彼女らの再形成のプロセスは、マクロなレベルからは「農村過剰人口問題」の解決策としての戦後開拓、という形で括られる。それはもちろん余儀なくされた入植という側面も大きかったであろう。しかし一方で個人の選択やライフコース戦略が介在する余地がなかったわけではないはずである。その際には、ひとつの進路選択としての入植という位置づけができるのではないか。

そこで本稿では、長野県から岩手山麓へと入植していった若者たちが、どのような論理に基づいて開拓という形での職業経歴の再構築を図ろうとしたのかについて考察する。

第二の課題は、戦後開拓地の若者たちが、一人前の経営者へと自立していく過程、別のいい方をすれば、青年（心理学的な概念ではない）から成人＝大人へと成長していく過程と、それを支えた要因を明らかにすることである。後に詳細にみるように、本稿の分析対象となる岩手上郷分村開拓地は、経営的にも成功を収め、定着率の高い集落である。

開拓地への定着は、何よりも農業や酪農の成功といった経済的要因に規定されることはいうまでもない。しかしながら、経済的な成功は当初から約束されていたものでもない。現在もお多くの入植者が定着（現住）している背景には、経済的要因にのみ帰せられない、別の要因があるのではないか。とりわけ若い単身者によって構成された開拓地において、彼らが定着していくうえでは、職業経歴を確立していく過程や、生殖家族を形成する過程を支えたものの働きが大きかったと考えられる。

本稿では、それらを支えたものとしての共同性に注目して、その形成過程と意味について考察する。

2. 対象と方法

（1）事例の概要

岩手上郷分村は、岩手県岩手郡滝沢村の岩手山麓に位置し、長野県下伊那郡上郷村（現飯田市）から分村移民という形での入植が行われた戦後開拓地である¹⁰。もともとは国有地であった開拓地は、一本木上郷（20戸入植、60ヘクタール）および柳沢上郷（25戸入植、125ヘクタール）の2地区から成っており、前者は「先遣隊」、後者は「本隊」と呼ばれた。こうした呼称じたいが、ここでの開拓が満州開拓の延長線上にある¹¹ことを物語っている。

この開拓地の特徴は、第一に単一の村（本村／母村＝上郷村）からの大規模な分村入植であり、そうした形態を取ったがためにその後も母村からの支援や交流が継続して行われたことである¹²。

戦前から戦時期にかけて、多くの満州移民を送出した下伊那地方では、敗戦にともなって帰国者を迎えることとなり、郡内開拓と県外開拓とを進めていくことになる。1946年11月に飯田市・下伊那郡で組織された下伊那郡国内開拓後援会（のちに下伊那緊急開拓者後援会に改組）は、全国の開墾できそうな土地を求めて開拓用地の実地調査を行い、帰国者が中心となって組織された満洲開拓自興会下伊那支部でも、県外開拓地を探して活発な県外送出を行った。それは「戦前満州移民の動員システムがそのまま戦後開拓に振り向けられた」ものとして評価される¹³。岩手上郷分村もまた、そうしたシステムによって送出・創出された開拓地であった。1946年11月30日に、上郷村村議会において開拓地への送出が決定され、翌47年1月に岩手県の開拓候補地の視察を行い、紆余曲折を経て岩手山麓滝沢村一本木の国有地の払い下げが決定し、5月に先遣隊20人が入植した。その際に本村は8万円の補助を与えた。翌48年5月には、柳沢を本隊入植地とし、第二の入植が行われている。

第二の特徴は、入植者の大多数が単身の若者たちによって占められていたことである。一本木上郷・柳沢上郷入植者（世帯主）に占める単身者（入植時点）の割合はそれぞれ65.0%（20人中13人¹⁴）、80.0%（25人中20人）である¹⁵。この数値は、岩手山麓の20世帯以上からなる他の開拓地入植者における単身者の割合が34.5%であることから考えても、かなり高いものであるといえよう¹⁶。

単身者の割合の高さは、必然的に入植者の年齢が低いことを意味する。1950年11月（入植から2～3年

が経過した時点)の入植者の平均年齢は、一本木上郷30.1歳(19歳~45歳、中央値27歳)、柳沢上郷24.8歳(19歳~45歳、中央値23歳)であった¹⁷。入植した時点は個人で若干のばらつきがあるが、調査時から2ないし3年程度遡るとすれば、開拓開始当初の平均年齢は一本木上郷で27.8歳、柳沢上郷で22.3歳程度であったことになる。

入植以前の経歴は、満州開拓団員が大半を占め、一本木上郷では75.0%(20人中15人)、柳沢上郷では40.0%(25人中10人)となっている。柳沢上郷地区において相対的に割合が低くなっているのは、その他に満蒙開拓青少年義勇軍出身者が8名含まれているため、樺太で農業を営んでいた人なども加えると、引き揚げ者が占める割合は両地区とも80.0%となる。引き揚げ者以外の前職としては、軍隊、農業、陸軍工廠などが挙げられる¹⁸。

第三の特徴は、いったん入植しながら、後に他の職業や地域へと移っていった人が比較的少ないと考えられることである。1982年の時点において、離農した世帯¹⁹は一本木上郷1戸、柳沢上郷8戸であり、単身者が多く、平均年齢の低い後者において離農者は多くなっている。定着(現存)率は両地区を合わせると80.0%である²⁰。20世帯以上からなる岩手山麓の戦後開拓地について同様に定着(現存)率を算出してみると、平均69.3%²¹となり、ここからも定着率の高さが窺えよう。飯田市歴史研究所による2007年時点の調査では、最初の入植者45人のうち、現存者16人、死亡者21人、うち2世が農業を継いでいる人11人、離農者6

人、茨城への再開拓2人²²となっており、現存者と後継者とを合わせると、定着(現存)率は60.0%となる。

(2) 調査方法

岩手上郷分村での調査を行うに当たっては、『岩手県戦後開拓史』『岩手山麓開拓史』および飯田市歴史研究所による先行調査等の文献資料を参照したうえで、2010年9月に集団聞き取りの形でライフヒストリーインタビューを実施した。ここで得られた情報を整理しライフコース整理表を作成したうえで、同年11月に個別にライフヒストリーインタビューを行った。調査項目は、基本属性(年齢、現在の家族構成)、定位家族経歴、教育経歴、職業経歴、生殖家族経歴、子どもの教育、入植の経緯、共同生活、開拓営農の経過、である。

(3) 対象者

ライフヒストリーインタビューの対象者は、岩手上郷分村に入植した第一世代の11名(男性8名・女性3名)である。3人の女性のうち1人はもともと対象者の女性の妻であった人であり、2人は入植者に嫁いできた人である。現在居住する地区は、柳沢上郷8名(男性6名、女性2名)、一本木上郷3名(男性2名、女性1名)である。

表1は、対象者の経歴をまとめたものである。ここから読み取れるライフコースの特徴についてまとめておくことにしよう。

対象者は、地域のリーダーとなるA氏・B氏夫妻

表1 対象者のプロフィール

基本属性				生育環境				教育経歴	職業経歴			家族経歴		
事例	性別	生年	西暦	入植時年齢	出生地	生業	きょうだい数(男女)	出生順位	学歴	初職→入植前の職業	満州経 験	軍隊経 験	入植時 家族構成	結婚年 齢
A	男	大正6	1917	32	上郷村	農業(1町5反)・養蚕	7(3,4)	7	高等小学校	農業手伝い(長野)→農業・獣医・装飾師(満州)→軍隊→家業手伝い(長野)	○	◎抑	妻、子(1)	25
B	女	大正11	1922	27*	喬木村	工業(傘製造)→農業	7	1	尋常小学校	織物工場(愛知)→農業(満州)	○		夫	22
C	男	大正13	1924	23	上郷村	農業	10	4	高等小学校、青年学校	少年非行兵(熊本・岡山)→家業手伝い(長野)		○	単身	24
D	女	大正15	1926	24*	鼎村	軍隊	5(2,3)	4	尋常小学校	製糸工場(長野)→子守(東京)→家業手伝い(長野)			夫	24
E	男	昭和2	1927	21	上郷村	農業→開拓団本部(測量設計)	12	6	高等小学校	農業(満州)→軍隊	○	◎抑	単身	不明
F	男	昭和4	1929	19	上郷村	農業(4反)	6(4,2)	4	国民学校	林野局(長野)→木材加工会社(長野)			単身	21
G	男	昭和4	1929	19	上郷村	農業	11(5,6)	11	高等小学校	陸軍工廠(愛知)→町工場(長野)			単身	21
H	男	昭和4	1929	19	上郷村	農業(稲作、養蚕)	10	4	国民学校高等科	満蒙開拓青少年義勇軍→家事労働(満州)→メリヤス編み(長野)	○	○	単身	21
I	男	昭和7	1932	15	上郷村	農業	6(5,1)	1	国民学校高等科	農業(入植)	○		単身	23
J	男	昭和8	1933	16	樺太	農業	9(5,4)	5	国民学校	農業(入植)			単身*	21
K	女	昭和9	1934	21*	岩手県	農業	7	2	中学校	農協(岩手)	○		両親	21

註1)軍隊経験者のうち、◎は実際の戦闘経験がある人を、○は入隊はしたが訓練中もしくは戦闘経験のない人を表す。「抑」はシベリア抑留経験者。

註2)*1は、結婚して当地に移住したときの年齢。なおA氏とB氏、I氏とK氏はそれぞれ夫婦である。

註3)*2は、資料上単身での入植者となっているが、実際には家族とともに入植したケースである。

を除けば1920年代後半から30年代前半に出生した人びとである。樺太から家族で引き揚げてきた1人を除けば、男性はすべて上郷村出身である。

生育環境をみると、家業のほとんどは農業である。耕作面積はごく一部の対象者に関してしか把握できていないが、多くが零細農家であったと考えられる。とりわけ満州経験のある5人のうち、A氏を除く4人は、いずれも親や年長のきょうだいが先に渡満、あるいは家族ともども渡満したというケースである。出生順位は男性の場合、1人を除いては長男以外の、その地域における「非あととり」である。

教育経歴については、対象者の世代は戦前期・戦時期・戦後期という教育制度の変革期に当たっている。対象者の半数以上は高等小学校（国民学校高等科）まで進学している。また、在学中に終戦を迎えたため、卒業に至る前に学業の継続が困難になった事例も存在する。

職業経歴は、初職が農業というケースは3人のみであり（在学中から家の手伝いをしていたというケースは多い）、うち2人は教育経歴の終了とともに入植したケースである。これは対象者の多くが「非あととり」であったことと関わっている。

軍隊経験は4人で、実際の戦闘経験を持つのは満州において根こそぎ召集を受けた2人、国内で訓練中に終戦を迎えた1人、満蒙開拓青少年義勇軍に所属していた1人である。満州で召集された2人はその後シベリア抑留を経験している。

入植時の家族構成は、男性は年長のA氏を除けばいずれも単身者であり、その妻B氏以外の2人の女性は結婚が入植のきっかけとなっている。結婚年齢はほぼ全員が20代前半であり、生年が近いことを鑑みれば、比較的短期間の間にまとまった形で生殖家族が形成されたことになる。

ごく少数の事例からではあるが、男性について、彼らに共通するライフコースパターンを抽出すると、概ね次のようになるであろう。零細農家の「非あととり」として生まれ、高等小学校（国民学校高等科）を卒業し、渡満した場合は農業従事から動員・抑留を経験し、帰国、国内にとどまった場合は非農業の仕事に従事し、敗戦後その職を失って帰郷、その後単身で岩手上郷分村に入植し、20代前半で結婚した。個々のライフコースはもちろん一様ではないが、共通する部分については、この開拓地がもつ特性と独特の経過が大きく関わっている。以下では個々の事例に即してその展開をたどってみることにしよう。

3. 入植以前の経歴

対象者の入植に至るまでのライフコースパターンを分かつひとつの大きな要素は、満州経験の有無である。とりわけ満州での開拓経験は、単なる職業経験や開拓農業を行っていくうえでのスキルにとどまらず、開拓地を形成していくうえでの重要な背景にもなっていたと考えられる。他方満州経験のない若者たちにとっては、開拓という選択を行ううえで、その前歴はどのような意味をもっていたのか（あるいはいなかったのか）。いくつかの事例を参照しながら読み解いてみたい。

（1）満州経験者の経歴

①A氏

1917年、上郷村に7人きょうだいの7番目（3男4女の末っ子）として生まれる。家業は農業。1町5反歩くらいの規模の農家だった。高等小学校を卒業後、青年団の役員などをしながら兄の農業を手伝い、のち40年に満州の水曲柳開拓団の話しを聞き、参加する。水曲柳開拓団では共同経営を行っていた。41年には、牡丹江の省立講習所で、獣医と装蹄技術の講習を受けた。42年にB氏と結婚。44年に長女が、45年に長男が誕生した。

45年5月、現地召集を受け、チチハルの歩兵部隊に入隊。通信の講習を受け、国境警備の任務に就く。8月31日に終戦を知る。その後シベリアに抑留される。48年8月に帰国・帰郷した。帰郷後しばらくは実家の農業の手伝いをした。

②E氏

1927年、上郷村に12人きょうだいの6男として生まれる。40年、高等小学校1年のときに、先に満州の下伊那郷の開拓団に行っていた父に呼ばれる形で渡満。父親は大古洞開拓団の本部で測量設計の仕事をしていた。当地では在満文教部の学校への進学を勧められたが、開拓団の幹部となることを願った父親の意向でそのまま残る。

終戦間際の45年8月10日に根こそぎ動員で召集され、綏化の警察の司令部で終戦を迎えた。8月22日、ソ連によって武装解除され、シベリアに抑留される。鉄道の建設などに従事したのち、48年10月に帰国・帰郷した。

③H氏

1929年、上郷村に10人きょうだいの4番目として生まれる。家業は農業で、稲作と養蚕を営んでいた。国民学校高等科を卒業して、44年5月に満蒙開拓青少年義勇軍に志願した。茨城県の内原満蒙青少年開拓義勇軍訓練所で訓練を受け、渡満。

義勇軍では教練と農業をして暮らし、鉄砲の訓練や、1人1町歩くらいの耕地を耕作していた。北安省鉄麗訓練所から三江訓練所に移り、そこで終戦を迎えた。捕虜となったが、その後現地の人の家で働くなどして、46年帰国。2年間ほどは実家でセーター編みなどをしていた。

いずれの事例も、満州経験を持つという点では共通しているが、渡満のきっかけはそれぞれ異なっており、また生年の違いはライフステージの違いとなって表れている。A氏の場合は、先に渡満していた同郷の人物の話しを受けて、単身で満州に行き、現地で生殖家族を形成している。E氏は、先に入植していた父親が一時帰国し、家族招致という形で渡満した。A氏・E氏はともにシベリア抑留を経験し、過酷な労働を強いられながらも帰国を果たした。それまでの過程において、A氏は妻B氏とともにあった幼い長男が逃避行のなかで病死し、E氏は両親を失っている。H氏は、満蒙開拓青少年義勇軍への志願・訓練を経ての単身での渡満であった。すでに小学校（国民学校尋常科）を卒業するころには満州への開拓入植を考えていたようで、「満州へ行って20町歩くれるっていうから、大百姓になるからっていうわけでした」と語っている。

(2) 満州未経験者の経歴

①C氏

1924年、上郷村に8人きょうだい（2男6女）の2男として生まれる。家業は農業。高等小学校卒業後、中学校へ進学したいと考えていたが、経済面から断念して、青年学校に通う。徴兵検査の前に少年飛行兵に志願し入隊。熊本で訓練を受けた後、岡山に移り、そこで終戦を迎えた。除隊後はしばらく実家にいて、手伝いなどをしていた。

②F氏

1929年、上郷村に6人きょうだい（4男2女）の4番目として生まれる。家業は農業。4反くらいの面積で営んでおり、その他に副業として運送業を営んでいた。国民学校を卒業して、帝室林野局に就職する。

3ヶ月ほどの訓練を受け、本格的に働き始めたところで終戦を迎えた。戦後も引き続き働いた後、48年に木材会社に転職した。

③G氏

1929年、上郷村に11人きょうだい（5男6女）の末っ子として生まれる。家業は代々農業。小学校卒業後、満蒙開拓青少年義勇軍に入って満州に行きたいと考えていたが、父親に反対された。父親には東京に就職するよう勧められたが、名古屋に行くことにした。ちょうど学校の推薦もあって41年に名古屋の陸軍造兵廠鳥居松製造所に勤め、小銃・拳銃・旋回機関銃などの製造に従事した。そこで働いているときに終戦を迎えた。終戦とともに帰郷したところ、知り合いが新しく工場を建て、陸軍工廠での旋盤やプレスといった機械の経験を買われて手伝うことになった。

これらの事例は、農家の出身者であるが、いずれも家業以外の職業に従事している。C氏は志願兵として、G氏は陸軍工廠に工員として勤務していたが、終戦によって職場を失い、帰郷している。戦災による都市の産業破壊や、軍隊ならびにその関連産業の解体にともなって農村への帰還を余儀なくされ、「過剰人口」としてまなざされた人びとの典型的な事例である。他方F氏の場合は戦後も引き続き同じ職場にとどまることができた。しかし復員してきた上司との人間関係をめぐり問題から、仲間たちとともに転職するに至っている。直接的な原因ではないとはいえ、ここでも終戦が職業経歴に影響しているのである。

4. 入植の経緯

戦前から戦時期にかけて、国外にも国内にも多くの人びとを送出した下伊那地方は、終戦によって再び多数の帰還者を迎えることとなった。全国的な動きとしては1945年11月に策定された「緊急開拓実施要領」に基づき、旧軍用地などを転用した開拓が進められていったが、地方自治体レベルにおいても独自の取り組みがなされていった。すでにみたように上郷村では、分村計画を立て、長野県庁から農林省への申請を経て、滝沢村への入植を決定した。先遣隊20人は47年5月に一本木上郷に入植、本隊は48年5月から49年6月にかけて4次にわたって柳沢上郷に入植した。分村入植は上郷村役場からの募集と応募によって行われたのだが、当事者たちはどのような思いで入植という選択

をしたのだろうか。また周囲の人びとはどのように反応したのだろうか。ひとつの共通した行動の背景にある個々の動機を探ってみることにしたい。

（1）自分の土地を持つこと

分村入植を決意するきっかけのひとつは、自分の土地を所有し、耕作するということである。そうした意識は満州や樺太での開拓経験者に共通するものであり、岩手上郷分村への入植は過去の経歴の延長線上に位置づく。

①A氏（妻のB氏の語り）

（A氏の）兄様は土地をいくらか分けてやって、近所で家を建てて、木なんかも材料をそろえてくれさったんです。したけど、うちの人（=A氏）、「なあに、ちっとばかり土地をもらって家を建ててもらったって働かじゃ食っていけないのだし」って思っておって、役場に行ったらしいの。無事で帰ってきましたという挨拶にね。

そしたら、ちょうどいい、岩手に若いものばかり行くんで、開拓の経験があるんだから、Aさんも開拓に行ってくれんかと言われて、それじゃと行ってここに来たんですよ。

帰郷後、実家の手伝いをしながら過ごしていたA氏は、「広大な満州を見た後では、（狭い長野の耕地に）満足できなかった」と語っている。妻のB氏もまた夫の希望に対して「やっぱり自分のところが欲しいし、だから、私も行って喜んでついてきました」と述べている。なお、A氏の兄は弟を送り出すにあたり、貨車1台分の材木を贈っている。

②J氏

うちのおやじは、やっぱり土地っていうものに対してはすごく愛着心があったっていうかね。だからわたしまだ子どもだったけども、子どもで土地をもらえないということは最初から、ここへ来たときから分かっていたけども。うちのおやじっていうのは「いや、おまえも土地をもらえたら、一生懸命まじめに働いていけば、部落の人たちは黙って見てないんだから、もしかして余ったような土地があればもらえるんだから、まじめに一生懸命稼いでいけば何とかなるから、できるだけ土地をもらえ」と。もらえるならもらえっていうように、おやじがうるさかったの。

J氏の父親は、樺太に渡り、自らの土地を開拓した経験を持つ。また、48年10月にシベリア抑留から帰国し、同年12月には岩手上郷分村へと入植したE氏は、決意の理由として「父の遺志」を挙げている。先にもみたように、上級学校への進学を打診されながら、「この子は20町歩の大地主にするつもりだから、ここへ置いておきたい」と断りを入れた父親の思いをくみ取っての選択であったのだろう。

（2）脱出願望

帰郷したものの、「過剰人口」としてまなざされる人びとにとっては、家郷は必ずしも居心地のいい場所ではなかった。生活を安定させるといったことよりもまず、そこを出たいという思いが先立つこともあったのではないか。それは若者に固有の心性であったかもしれない。

①I氏

満州から引き揚げてきて、そして、親父はまだシベリアに、とられて（抑留されてい）たから。お袋だのおばさんだのおじさんにね、そういう人らと一緒に引き揚げてきて、一緒に住めねえわけだ。住めねえが、いくぶん、俺の場合は、お袋の実家へ、預けられた。お袋のところ（実家）にはね、同じようなところが、ダラダラいるわけだ。ほいたらもう、小さくなって、居なきゃならんわけだ。んでその気兼ねすることが嫌で嫌で、も一どこへでも良いから行きたかった。

I氏の場合は、帰郷した際に親族の家に身を寄せた際の肩身の狭さが「どこへでも良いから行きたい」という思いにつながっている。それはおそらく多くの引き揚げ者にとっての共通経験であっただろう。もっともI氏の伯父は入植に反対した。岩手の条件の悪さに配慮してのことだった。I氏はそれを振り切る形で入植に至っている。

②F氏

おれみたいな学歴のない無学なのが開拓に行っても自分の夢が抱けるかな思って開拓に来ただけど。その前に木材会社に入っているもね。やっぱり役所に勤めていたのが、一般会社に入るとどうもうまくないんですよ。どうも自分の生意気ざかりだもん、19や20歳前のときはね。だからこんなとこでいても先の見通しはないからって言って来たの、開拓に。

F氏は、東京帝国大学を出た知り合いが開拓に行ったという話を聞き、それがきっかけで入植を考えるようになった。そこには自らの新たな将来を切り開こうとする意思が垣間みえる。F氏にとっては、少なくとも生計を立てるといふ観点からすれば、入植は必ずしも必然ではなかった。それでも職業に行きづまりを感じるなかで、「自分の夢」を賭して入植を選択している。

戦後開拓の第一義的な政策的意図は、食糧増産にあったことはいまでもなく、実際対象者の語りのなかにもその意図を受け止めての証言はたびたびみられた。ただし分村入植を推進する村役場の意向とは別に、家族や親族が積極的に賛成するケースは多くはなかったようである。

③G氏

こっちに来るときは、おれは手をついて行かせてくれって言って。おれは初めて手をついて（笑）。失敗したらどうするんだって言われたけど、失敗してもうちへは帰ってきませんからって言って、それでうちを出てきたんですけどね。失敗しないように頑張りますって言って。何とか行かせてくれって言って。

大人たちからすれば、若者たちを単身送り出すことへの躊躇があったのだろう。それでも入植した若者の多くは、希望に胸を膨らませて岩手へと旅立っていった。岩手上郷分村への入植は、若者たちが将来を切り開くための企図でもあったのである。それは戦前に満州に渡った若者たちの心性の再生産であったのかもしれない。

5. 共同経営の生活

希望を抱いて入植した若者たちを待ち受けていたのは、過酷な自然条件であった。対象者全員がいずれも「えらいところへ来た」という印象を抱いたという。しかし彼らは親や母村の人びとに送り出された手前、もはや帰ることはできず、また地元岩手の人びとからの「よそ者」に対する冷ややかな視線（それはやがて開拓の成功によって信頼へと転化していく）を浴びながらの生活を余儀なくされた。このような状況のもとで採られたのが、共同経営という形であった。そのありようは、開拓当時の調査資料のなかで次のように紹介されている。

（上郷開拓地の一引用者）その特徴の一つは、完全なる共同の型態である。開拓事業建設の過程は共同によることが望ましいということが、開拓の指導者層の間に殆んど常識の如く唱導されてきた。その合理主義が、殆んど完全に近い迄に実行されている事実をこゝに見ようとするのである。²³

1948年当時、母村上郷村における重要事業としては、1. 製材工場の整備、2. 診療所の整備、3. 揚水施設の増加、4. 大貯水池の設置、5. 岩手開拓の完遂、6. 農工技術学校の設立が挙げられていた。その方針について、岩手県農地部は、当時の上郷村の革新村政に言及して、「コルホーズの夢」といった表現をしている²⁴。

すでにみたように、岩手上郷分村入植者のほとんどは単身の若者であった。そこでハーモニカ住宅と共同食堂を建築し、地域内に支部を設け、全戸の共同経営、「一つ釜の飯、一つの財布での共同生活」を開始した²⁵。その意図をリーダーのA氏は「共同で資金がね、1人あたりいくらって出るでしょ。分けてしまえば、微々たるもんだけれど、全部資金を1つにして使う場合はね、大きな仕事ができるわけだ」と語っている。そこには満州水曲柳開拓団での1年間の共同経営の経験も反映されていたのかもしれない。A氏は資金の管理、母村への資金援助の要請、資材の導入などを担っていた。このようなリーダーシップは、より若い仲間たちの目には以下のように映っていた。

①J氏

開拓に入った当時はうちの兄貴と、Aさんと、もう1人（後に開拓地を）出た人がね、家族持ちが3人だけだった。あとはみんな20過ぎの若い人たち。その当時、結婚してたのは3人だけだったから、それがこっち来てから結婚したので。年上の人っていうのが25、6か、27、8ぐらいの人が3人いたと思うけどね、ほとんどはみんな独身だったな。で、Aさんが、この開拓団の団長としてずっとやってくれて。（Aさんは）まじめな人だし。それでまあこの開拓は、割にまとまってると思う。やっぱりなんでもそうだけど、やっぱり先立つ人の方がちゃんとしないと、やっぱり集団生活では。

仲間のまとまりのよさは、対象者から異口同音に聞かれるものであった。それは次の語りにも表れている。

②G氏

不思議と飲んでも喧嘩はしなかったねえ。最初から、どうしても和を持って共同でやってかなきゃダメだと、とにかく、和を持ってやろうという頭だけはあったねえ。とにかく、送り出された時にすぐ村で、熱心になって送り出してくれたからねえ、絶対失敗はできねえなって…。

こうした仲間の存在は、リーダーから見た時にはどのようなものだったのだろうか。

③A氏

25戸もあると、全員が全員、気持ちよく賛成とか協力体制には難しいもんね。けれども、どこの社会でもそうだけど、力のある者が協力姿勢にあるということは大事なことだね。だから、うちでは、先に立つとる強力な連中が5、6人、本当に協力してくれたの。服従と言っちゃ悪いけど、言うことを聞いてくれてね。だから、ほかの人たちもすべてまとまりがついて、5、6人の者を大事にしてあれしとったけど、それらが反発するとなかなか統制がとれんけれども、その点が良かったです。

このような地域社会のありようは、主観的にもまた客観的にもここでの開拓の成功要因として認識されていた。そして、若者たちの生活を支えたのが、A氏の妻B氏であった。共同生活のなかで、B氏や結婚によって長野から開拓地へとやってきたD氏は若者たちの母親的な役割を果たしている。

④B氏

ここへ来たときには、本当、掘っ立て小屋へ男ばかり、20人くらいいたのかな、若い者ばかり。17くらいから23、4の男衆ばかりね。（中略）そこで共同生活を一緒にしてね。それでわたしは山へ行って食べれる草なら何でも取ってきて。それで細かく切っては若い衆、1日これだけの米って決まっているから、それ以上はないんだもんね。買う金もなければただ配給であるだけで。それで少しでも腹一杯にしてやろうと思って。そしたら今度は一本木の開拓の人が馬鈴薯をたくさん作ったって、それをくれたんだって。それでその馬鈴薯を皮をむかずにきれいに洗って、それで細かく切ってご飯に入れて、それでみんなご飯を食べさせて。そういうことを1人でしていたの。

⑤D氏

こっちに来てから1年と何カ月か、共同生活しました。ここへ来てびっくりしたのがこんな若い人たちがこの山奥によく住んでるって感心したの。何を楽しみに生活してるのかと思って。かわいそうみたいな感じで。（中略）炊事当番とか。ここへ来たときは大根みたいなものだけど、蕪って、そればかりなようなご飯だって、食べられなかった。これが悲しかった。

岩手上郷分村での共同経営・共同生活は、ここが若者たちの開拓集落であったからこそ必要なものであり、また若者たちによって構成された地域であったからこそ可能であったといえよう。リーダーであるA氏とB氏の夫妻と、他の入植者との年齢差は10歳ほどであり、親子ほどの世代差が生じるものではなかった。協調的な関係性は個人のパーソナリティによる部分が大きい、その一方でたとえ偶然であるにせよ、地域社会が適度なリーダーシップとほぼ同じ世代の人びとによって構成されたこともまた重要な要因であったと考えられる。

6. 結婚と個人経営への移行

共同経営・共同生活のなかで若者たちが成長していくことによって、入植した人びとは新たな課題と向き合うこととなった。それは個人経営への移行である。約3年間続いた共同経営から、一本木上郷では1951年に、柳沢上郷では52年1月1日に個人経営に移ることとなった。その背景には、個人経営に切り替えることによって自分の経営に意欲をもってもらえるように、といった配慮が働いていた。他方、個人が経験を重ね、スキルを身につけることによって考え方や成果にも相違が生じるなど、平等的な共同経営の限界も露呈しつつあった。個人経営に移行したことは、若者たちが名実ともに自分の土地を持つことを意味した。聞き取りからはそのときの喜びの大きさが伝わってきた。

しかしながら、急激な経営形態の変化がもたらす影響は当然大きい。そこで安定的な移行のために2つのことが考えられた。ひとつは「助け合いの組」であり、もうひとつは結婚である。

(1) 「助け合いの組」

個人経営への移行に当たっては、1戸当たり4町歩の耕地、育成牛1頭、鶏17羽を配分した。さらに5戸

1組の「助け合いの組」を作り、1つの組に共同で馬1頭、発動機1台、脱穀機1台が割り当てられた。耕地は開墾済み、焼き畑、原野と分けて平等にするため抽選で決められた²⁶。

「助け合いの組」を作った意図をA氏は次のように語っている。

個人経営になったからといっても、個人でできるものじゃないから、近くの者が5人ずつ1つの組組織にして、そして、それを「助け合いの組」という名前をつけてやって、何事も5人が助け合ってやるんだよということにして、5人で負えない部分があったときには組合へ持ってきてくれれば、組合みんなまで応援するからという組織的なものをつくって、それで個人（経営）に分かれたんです。ちょうど馬も5頭しかなかったの。だから、馬1頭を1つの組で、馬が大変なのね。個人経営になると、お互いが個人欲で、言い方が悪いけれども、もう一生懸命だもんね。馬がかわいそうなのよ。5人に使われて大変だったけどね。

A氏によれば、5人という単位の「助け合いの組」には、格別参考にした事例はないとのことであった。それは地域的な近隣のまとまりであり、相互扶助の役割を担っていた。個人の意欲が発揮されていくとともに、経営には格差が生じ、脱落者が出ることも予想された。「助け合いの組」には、個人経営に移行したことによって生じるリスクを低減するという意図が込められていたのである。

(2) 結婚

共同経営から個人経営への移行の際に、A氏がひときわ気を配ったのは、ほとんどが単身者である入植者たちの結婚を斡旋することであった。入植から3年目に至り、「なんといっても母ちゃんもらわないと、個人経営に移れない、と思った」という。A氏は仲間の嫁探しに奔走した。

①A氏

嫁さ、あの娘のおるようなところ行ってね、あの「ベコッコ（牛）見せてくんないー」って行くわけ。すると、「うちには、ベコッコ、いながんすー」って言うわけ。さらに「あの、角のないベコッコよー」なーんて（返す）。それで、その娘をまず紹介してもらってね、それから、こりゃいいなと思うと、そ

れじゃ、いつがいいか、見合いをさせてくれないかってお願いするの。いいよっていうことになるよね、じゃ、いつ行くかね、どこそこで見合いをするよ。ということでね、見合いをするわけ。

一方、若者たちは結婚をどのように受け止めていたのだろうか。

②F氏

個人になる前に独りじゃ生活できないんだからかかあをもらえということ。それで（A氏が）かかあを世話してくれたわけですね。（中略）いや、いい娘さんがいるから、おれに世話させてくれというわけだ。そのときに言われたんですよ、（昭和）25年に。まさかまだ若いのに嫁なんかもらってられないわけだ。けど、Aさんに個人になるんだから独りじゃご飯を炊くこともできないんだから結婚するんだと言われたわけですね。（中略）確かに独りでは開拓できないね。女房の助けがあってこそ成し遂げたんじゃないですか。

③G氏

もう家内持ったのかな？っていう感じでね、ずっと早かったからね。でも当時は手間欲しさにももらったような感じですよ。自分独りじゃとてもじゃなく大変だから、何とか早く家内をもらって2人でやらなきゃ、独りだと大変だなんていう頭はありましたけどね。

当事者にとっては、結婚はまだ早い、という思いもあったようである。しかし実際に個人経営に移行していくうえでは、単なる心の支えといった側面だけではなく、労働力としての家族を必要とした。生殖家族の形成は、個人経営を家族経営とすることに他ならなかったのである。

なお、若者たちの妻となった女性たちの多くは、郷里の長野県ではなく、地元岩手県の出身者がほとんどである。そこには次のようなA氏の考えが反映されていたようである。

早く岩手県人、滝沢の人間にならなければ、いつまでも俺は長野県人だよという気持ちでおったら、俺ははむきになってしまうもんね。だから、「Aが一番早く岩手県人になったな」と言って笑われたけど、それが大事だと思うのね。（中略）岩手の方々

も、長野県人は先進国（の人）だと、進んでいるんだという観念があるのね。だから、それに増長して偉くなったら終わりなんです。そういう見方で見ていただけるということは本当にありがたいことで、なお、それこそ頭を低くして、早く岩手県人に、滝沢の人間と組みたいという気持ちが良かったんじゃないかと思うけどね。

結婚というライフイベントと個人経営への移行との重なりは、若者たちが文字通り自立し、職業経歴をある程度確かなものとするに大きく関わっていたと考えられる。その際には、地元との通婚によって親族ネットワークの基盤も地理的に安定したものとなっていく。入植から3年を経た時点で若者たちが経験したこれらの出来事は、戦争によって断絶した職業経歴の、あるいは見直しを余儀なくされたライフコース戦略の、再構築過程のひとつの結節点であったのである。

7. 小括

戦後、岩手上郷分村に入植した20代前半の若者たちは、現代の同じ年代の若者と比べれば、ずっと「大人」であっただろう。しかし戦争による大きな社会変動のなかで、職業経歴やそれを包含する彼ら彼女らのライフコースはきわめて不安定なものであった。そうした不安定さは若者に限ったことではなく、日本人全体に共通するものであっただろう。ただし、将来像の描きにくさという点において、その重みは若者たちにおいて独特の深刻さをともなっていたと考えられる。

本稿で明らかにしようとしたのは、岩手上郷分村というひとつの戦後開拓地をフィールドにした、若者たちの「大人」へのなり方のプロセスである。この開拓地は、戦後開拓地のなかでも希有な成功事例として位置づけられる。その要因は、母村から長期間にわたって行われた継続的支援、入植者たちの農業から酪農への転換といった経営面での先見性や、熱心さといったものに求められるであろう。しかし本稿ではそうした要因に加えて、この開拓地の若者たちの成長の場としての側面に注目した。ここでの分析から明らかになったこの地域のもつ特性は、次のようにまとめられる。

第一の特徴は、この戦後開拓地に入植した人びとの年齢構成に由来する。ほぼ同世代の単身者がほとんどである入植者たちは、共同経営・共同生活を必要とした。そこにおいてさほど年齢差のないリーダーを中心

としたまとまりを形作れたことは、今日まで多くの入植者たちの経営が引き継がれていることの要因になっていると考えられる。その際にはただ単にリーダーシップのみが重要な意味をもったわけではなく、フォロワーたちとの協調関係も大きく影響している。

第二の特徴は、共同経営から個人経営への移行が、スムーズに行われたことである。20代前半で入植した若者たちは、やがて20代後半から30代になろうとする時点でそれぞれ独立することになった。その際には、それまでの共同性をゆるやかな形で維持するような対応や、個人経営を見越したタイミングでの生殖家族の形成によって、独立にともなうリスクが抑制された。これらによってライフコースの基盤の安定が図られたと考えられる。

本稿が分析対象としてきたのは、あくまでもひとつの成功事例に過ぎない。また聞き取りを通してくみ取ることのできなかった様々な葛藤や労苦というものもあったであろう。実際に若者たちは大きな不安を抱えたなかで開拓に取り組んでいったのである。対象者の1人であるG氏は、当時を回想して次のように語っている。

開拓が始まったころは本当に若者たちの集落でした。最初に来たときに、はたしてこんな山の中へ来て、自分たちはやっていけるんだろうかってお互いにそういう気持ちがあったんですよ。口には出さなかったんですけど。それで一番（経営が）安定したときに飲みながら話して、「いや、あのときは本当にえらいところに来ちゃったと思ったな」って（言ったら）、「いや、おれもそう思った」みんなおれもそう思ったってね。それだから、共同の力を仲良くやっていかないと、団結してやっていけないとやっていけないなという考えがつくづく頭に染み込みましたからね。

戦後における「農村過剰人口問題」のなかで、その問題の中心としてまなざされた若者たちは、様々な形で自らのライフコースやキャリアを（再）構築しようとした。本稿において検討した戦後開拓地の若者たちもまた、そうした多くの事例のなかのひとつである。それは多大な労苦の上に立ちながらも、きわめて幸運な事例であるかもしれない。その幸運は、この開拓地において行われた移行の成功に支えられた部分が大きかったといえよう。

このような形で行われた若者たちの戦後開拓地への

入植は、ある特定の世代経験である。ここにみられたような職業経歴やライフコースの構築過程を、前後の時代および世代との関係性において位置づけること、そして本稿では十分に検討することができなかった、技能の習得といった職業的社会的プロセスの解明については、今後の課題としたい。

〈註〉

- 1 池岡義孝「兵役体験とライフコース」森岡清美・青井和夫編『現代日本人のライフコース』日本学術振興会、1987年所収。
- 2 並木正吉のいう農村の若者の「地すべり的な移動」は、1952年ごろから顕在化していく（並木正吉『農村は変わる』岩波新書、1960年）。
- 3 蘭信三「満州開拓団を母体とする戦後開拓集落における「共同性」—熊本県東陽開拓農協の事例—」『ソシオロジ』第33巻1号、1988年。
- 4 原田由起乃「戦後開拓地における集団の組織化と変容—岩手県松尾村前森山集団農場を事例として—」『人文地理』第50巻2号、1998年、北崎幸之助「戦後開拓地の変容過程におけるアクターの果たした役割—茨城県南部大八洲開拓農業協同組合地区を例として—」『地理学評論』第75巻4号、2002年（のちに同『戦後開拓と加藤完治—持続可能な農業の源流—』農林統計出版、2009年に所収）、伊藤淳史「加藤完治の戦後開拓：福島県白河開拓における共同経営理念をめぐって」『農業問題研究』第1巻1号、2004年、同「戦後開拓における加藤完治の営農指導—入植者の反応に着目して—」『村落社会研究』第13巻1号、2006年。
- 5 大竹晴佳「野原地区における開拓の展開—戦後開拓の30年とその後をめぐって—考察—」『新見公立短期大学紀要』第29巻2号、2009年。
- 6 満蒙開拓を語り継ぐ会編『下伊那のなかの満洲』第1集～9集、2003～2011年、飯田市歴史研究所編『満州移民—飯田下伊那からのメッセージ—』現代史料出版、2007年、森武磨・齊藤俊江・向山敦子「戦後西富士長野開拓団調査報告」『飯田市歴史研究所年報』第5号、2007年、同「戦後岩手上郷分村調査報告」『飯田市歴史研究所年報』第6号、2008年、森武磨「オーラルヒストリーと歴史学—満州移民を事例として—」『歴史と民俗』第27号、2011年。
- 7 三好豊「戦後高冷地におけるリーダーのライフ・ヒストリーの分析—戦後開拓への諸契機の解明—」『農業史研究』第42号、2008年。
- 8 こうした課題設定については、高瀬雅弘・村上亜弥

「戦後開拓地のライフヒストリー（1）—青森県鱒ヶ沢町山田野地区における「緊急開拓」の事例—」『弘前大学教育学部紀要』第105号、2011年を参照。

- 9 道場親信「戦後開拓と農民闘争—社会運動の中の「難民」体験—」『現代思想』2002年11月号、2002年、同『復興日本』の境界—戦後開拓から見えてくるもの—中野敏男・波平恒男・屋嘉比収・李孝徳編『沖縄の占領と日本の復興—植民地主義はいかに継続したか—』青弓社、2006年、同「戦後開拓—再考—「引揚げ」以後の「非／国民」たち—」（道場親信・小山田紀子・川喜田敦子「離散者が問う戦後世界像—その包摂と排除に見る植民地主義の継続—」）『歴史学研究』第846号、2008年所収。
- 10 入植に至る経緯の詳細については、山上忠治『遙かなる小さな足跡』自費出版、1996年、森・齊藤・向山、前掲「戦後岩手上郷分村調査報告」を参照。
- 11 岩手山麓開拓史編集委員会編『岩手山麓開拓史』滝沢村役場、1982年、P. 78。現在もこうした呼称は第一世代の人びとの間で用いられている。
- 12 森・齊藤・向山、前掲論文、P. 208。
- 13 同上論文、P. 207。
- 14 なお、1949年11月に岩手県農地部が実施した調査では、20名中独身者は5名となっている（岩手県農地部『昭和二十四年 岩手の開拓地—五開拓地事例の総合的調査—』、1949年、P. 24）ことから、入植してから比較的短期間のうちに生殖家族を形成した人びとがいたことがわかる。
- 15 岩手山麓開拓史編集委員会編、前掲書巻末の「入植者および在住者名簿」より算出した。
- 16 もっとも入植者の構成には地区ごとに違いがあり、北上開拓農事実行組合（1947年5月発足）のように、27戸中25戸（92.6%）が単身者によって占められていたところもある。
- 17 森・齊藤・向山、前掲論文、P. 210表1より算出。
- 18 同上。
- 19 ここでは開拓地から転出し、籍者が変更しているケースを指す。
- 20 岩手山麓開拓史編集委員会編、前掲書「入植者および在住者名簿」より算出。
- 21 同上。
- 22 森・齊藤・向山、前掲論文、P. 211。
- 23 岩手県農地部、前掲書、P. 10。
- 24 同上書、PP. 12-13。なお、聞き取りの対象者の間では、そうした意識はほとんどなかったようである。この点については後日あらためて検討することとしたい。

²⁵ 山上、前掲書、P. 30。

²⁶ 森・齊藤・向山、前掲論文、P. 217。

謝 辞

本稿をまとめるにあたっては、岩手上郷分村に現在もお住まいの第一世代の方々に大変お世話になりました。現地での聞き取り調査は弘前大学教育学部「地域コミュニティ調査実習」の一環として行われ、参加した学生の協力も大きなものでした。飯田市歴史研究所の皆様には、貴重な先行研究の成果と情報をご提供いただきました。記してお礼申し上げます。

附 記

本稿は、平成23年度日本学術振興会科学研究費補助金（若手研究（B）課題番号21730393）による研究成果の一部である。

（2012. 1. 10 受理）